

曖昧性と美：俳句の美的評価の日独文化比較

櫃割 仁平

京都大学大学院教育学研究科

日本学術振興会

Ambiguity and Beauty: Japan–Germany Cross Cultural Comparison on Aesthetic Evaluation of Haiku Poetry

Jimpei Hitsuwari

Graduate School of Education, Kyoto University

Japan Society for the Promotion of Science

Abstract

Ambiguity was decomposed into ambiguity of meaning and ambiguity of emotion, and their effects on the aesthetic evaluation of haiku were examined for Japanese and German speakers. 450 Japanese and 373 German speakers were analyzed. The online experiment consisted of two parts: one part for evaluating haiku and the other for answering questions on personality traits. Participants rated one haiku on 10 characteristics, including the degree to which they felt beauty, ambiguity of meaning, awe, and nostalgia. The results showed that as ambiguity of meaning increased, the aesthetic evaluation of haiku decreased, but this tendency was greater for German speakers than for Japanese, and this cultural difference could be explained by the high-low context society. As a measure of ambiguity of emotion, we focused on the higher-order emotions of awe and nostalgia, which encompass both positive and negative emotions, and the more we felt these emotions, the higher the aesthetic evaluation of haiku. Ambiguity, one of the characteristics of haiku known as "the beauty of silence," was found to be an important predictor of aesthetic evaluation, and at the same time, there were cultural differences in this relationship.

1. はじめに

世界最短の詩といわれる俳句(木山 2020)の美しさは、「不言の美」とも称され、余計なことは書かない、言わないところが俳句の特徴である(新田2013)。つまり、俳句は曖昧性を多く孕んだ芸術である。曖昧性は芸術鑑賞の心理学研究においても重要なトピックであり、その多くは、絵画や画像を用いて研究が進められている(Muth, Hesslinger, and Carbon 2015)。一方で、俳句を含む詩を題材にした研究は限られているが、俳句に関する2種類の曖昧性、すなわち意味の曖昧性(新田 2016)、感情の曖昧性(岸本 2008)についての言及を参考に、本研究では、曖昧性が俳句の美的評価にどのように影響を与えるかを検討する。

意味の曖昧性は、芸術の評価において重要な要因となるが、その影響の方向性については結果が一貫していない、つまり、曖昧性が芸術の評価を高める時もあるれば、低める時もある(Muth, Hesslinger, and Carbon 2015)。また、曖昧性耐性—曖昧性を受容し、楽しむ力—の

個人特性も芸術の嗜好を予測することが知られている (Swami et al. 2010)。曖昧性耐性 (Hitsuwari & Nomura in press) の文化差に加え、東洋の高文脈社会と西洋の低文脈社会を考慮すると (Hall 1976)、日本語話者の方が曖昧な俳句においても、意味を察し、より高い評価に繋がるのが予想される。

一方、俳句を含む芸術鑑賞の時、曖昧なものは意味だけでなく、鑑賞者の感情も非常に曖昧なものとなる、つまり、ポジティブともネガティブともいえない感情が芸術の美的評価に影響を与えることがある (Menninghaus et al. 2017)。ここでは、ポジティブ・ネガティブの感情価が同居しうる2つの高次感情である畏敬の念とノスタルジアに注目するが、それらの感じ方の個人特性も芸術の評価に影響しうる (Hitsuwari & Nomura 2021)。具体的には、畏敬の念・ノスタルジアを感じやすい個人程、俳句の美を高く評価する。状態レベルの畏敬の念、ノスタルジアが俳句の美的評価に与える影響は未だ未検討だが、先行研究を考慮すると、畏敬の念やノスタルジアを感じれば感じる程、俳句の美的評価は高くなると予想される。

それら2種類の曖昧性に焦点を当てながら、定型が17シラブルと極端に短く、曖昧さを常に包含しうる芸術である俳句の美的鑑賞中の心理状態と関連する個人特性について検討する。さらに、本研究では、俳句発祥の地である日本と西洋文化の中でもドイツ語俳句が広く知られているドイツの参加者を対象にした。

2. 方法

本研究は、京都大学大学院教育学研究科倫理審査委員会の承認を得た (受理番号CPE-353)。また、本研究の実験パラダイムは先行研究 (Hitsuwari & Nomura 2021) に準拠している。

3. 参加者

日本語話者450名 (女性 293名, 男性 155名, その他 2名, $M = 39.52$, $SD = 11.15$), ドイツ語話者373名 (女性 150名, 男性 220名, その他 3名, $M = 28.67$, $SD = 9.17$) がそれぞれCrowdworks (<https://crowdworks.jp/>), Prolific (<https://www.prolific.co/>) で集められた。ドイツ語話者は、ドイツ人243名, ポーランド人68名, その他62名で構成されている。

4. 刺激

CLASSIC HAIKU (Lowenstein 2007) に収録されている松尾芭蕉, 与謝蕪村, 小林一茶, 正岡子規の俳句を準備した。予備調査で、8名が俳句の感情価評価を行い、よりネガティブな感情価を持つ俳句61句 ($Range_{valence} = 1.17\sim 3.17$) を採用した。

5. 手続き

実験もオンラインで行われ、大きく俳句の評価を行うパートと個人特性に回答するパートに分けられた。俳句一句が画面に提示された7秒後に、参加者は、(1) 美、(2) 意味の曖昧性、(3) 畏敬の念、(4) ノスタルジア、(5) イメージの鮮明性、(6) 俳句内容の感情価、(7) 鑑賞者が抱いた感情価、(8) 理解度、(9) 感動、(10) わびさびの10の項目に100件法のVAS評定を行った。本研究では、(1)~(4) の得点について検討した。その評定をランダムに提示される23の俳句に対して繰り返した。最初に提示された4句を最後に再評価させることにより、評価の信頼性を確認した。その結果、美 ($r = .60$)、意味の曖昧性 ($r = .56$)、畏敬の念 ($r = .56$)、ノスタルジア ($r = .57$) の4項目は中程度の再検査信頼性を有していることが明らかになった。

個人特性に回答するパートでは、曖昧性耐性 (今川 1981)、特性畏敬 (Shiota, Keltner, and John 2006; Nomura, Tsuda, and Rappleye in press)、特性ノスタルジア (楠見 2014; Routledge et al. 2008)の尺度を含む質問紙に回答した。

6. 結果と考察

意味の曖昧性と俳句の美的評価

俳句の美的評価を従属変数に、意味の曖昧性と文化、それらの交互作用を独立変数に投入して階層線形モデルで分析を行った。その結果、意味の曖昧性 ($b = -.23, SE = .01, t = -38.67, p = .00$)、意味の曖昧性と文化の交互作用 ($b = -.08, SE = .01, t = -7.01, p = .00$) が有意であった (表1; 図1)。また、曖昧性耐性にも文化差が見られ、日本語話者 ($M = 4.50, SD = .51$)の方が、ドイツ語話者 ($M = 4.41, SD = .59$) よりも曖昧性耐性が高いことが示された ($t = 2.28, p = .02, d = .16$)。

結果より、意味の曖昧性が上がれば上がるほど、俳句の美的評価は下がったが、文化との交互作用がみられた。具体的には、日本語話者の方がその傾きが小さく、曖昧性を高く感じている時の美的評価がドイツ語話者よりも高かった。曖昧性が上がるほど俳句の評価が下がった結果は、俳句の曖昧性そのものが美しさに繋がるよりむしろ、曖昧性の解消が美しさに繋がることを示唆している。曖昧性それ自体よりもその解消が芸術の美的評価に重要であることは先行研究とも一致する (Muth and Carbon 2013)。さらに、高文脈社会である日本の参加者が、少ない情報から対象を評価することができ、低文脈社会のドイツ語話者にとって、それがより難しいことも示唆している。それは、曖昧性耐性が、日本語話者の方がドイツ語話者より高いことが示されたことによっても支持される。

7. 感情の曖昧性と俳句の美的評価

俳句の美的評価を従属変数に、畏敬の念と文化、それらの交互作用を独立変数に投入して階層線形モデルで分析を行った。その結果、畏敬の念 ($b = .36, SE = .01, t = 52.15, p = .00$), 畏敬の念と文化の交互作用 ($b = .06, SE = .01, t = 4.60, p = .00$) が有意であった (図2A)。同様にノスタルジアも分析を行い、ノスタルジア ($b = .38, SE = .01, t = 61.92, p = .00$) とノスタルジアと文化の交互作用 ($b = .09, SE = .01, t = 7.64, p = .00$) が有意であった (図2B)。

感情の曖昧性については、畏敬の念とノスタルジアを感じれば感じるほど、俳句の美的評価が上がるという結果が両文化で一致したが、文化との交互作用が有意であり、ドイツ語話者の方が、その傾きが大きかった。つまり、ドイツ語話者の方が、それらの感情の喚起が俳句の美的評価に与える影響をより顕著に受ける。畏敬の念やノスタルジアが美的評価を予測するのは先行研究 (Hitsuwari and Nomura 2021) と一致するが、その効果に文化差を見出したのは本研究が初めてである。西洋人が畏敬の念やノスタルジアをよりポジティブに捉えるためそれらの感情と美がより密接に関連している一方で (Bai et al. 2017), 東洋人は感情の両価性を受け入れやすく、つまり必ずしもポジティブと評価しないため (Nakayama et al. 2020), 西洋人程には俳句の美的評価を予測する感情因子にはならなかったのではないかと考えられる。

8. 結論

曖昧性を意味の曖昧性、感情の曖昧性に分解し、それらが俳句の美的評価に与える影響を日本語話者とドイツ語話者を対象に検討した。その結果、意味の曖昧性が上がるほど、俳句の美的評価は下がったが、その傾向は日本語話者よりもドイツ語話者の方が大きく、その文化差は高低文脈社会によって説明されうる。感情の曖昧性を測る指標としてポジティブ・ネガティブの感情を包含する畏敬の念とノスタルジアの高次感情に注目したが、それらの感情を感じれば感じる程、俳句の美的評価は上がった。「不言の美」と称される俳句の特徴の1つである曖昧性は、美的評価の重要な予測因であると同時に、その関係には文化差があることが明らかになった。

引用文献

- Bai, Yang, Laura A. Maruskin, Serena Chen, Amie M. Gordon, Jennifer E. Stellar, Galen D. McNeil, Kaiping Peng, and Dacher Keltner, 2017, "Awe, the Diminished Self, and Collective Engagement: Universals and Cultural Variations in the Small Self." *Journal of Personality and Social Psychology*

- 113(2):185–209.
- Hall, Edward T, 1976, *Beyond Culture*, Anchor Press/Doubleday, Garden City. (岩田慶治訳, 1979, 『文化を超えて』 ティビーエス・ブリタニカ.)
- Hitsuwari, Jimpei, and Nomura, Michio, 2021, "How Individual States and Traits Predict Aesthetic Appreciation of Haiku Poetry." *Empirical Studies of the Arts*.
- Hitsuwari, Jimpei, and Nomura, Michio, in press, "Developing and Validating a Japanese Version of the Multidimensional Attitude toward Ambiguity Scale (MAAS)." *Psychology*.
- 今川民雄, 1981, 「Ambiguity Tolerance Scaleの構成(1): 項目分析と信頼性について」 『北海道教育大学紀要』 32(1): 79-93.
- 岸本尚毅, 2008, 『俳句の力学』 ウエップ.
- 木山幸子, 2020, 「俳句の心理言語学的一考察—定型詩を介した感情認知について」 『ことばと文字』 13: 35-43.
- 楠見孝, 2014, 「なつかしき経験に及ぼす加齢の影響：ノスタルジアとの差異の検討と傾向尺度の作成」 日本社会心理学会第55回大会発表論文集.
- Lowenstein, Tom, 2007, *Classic Haiku: The Greatest Japanese Poetry from Basho, Buson, Issa, Shiki, and Their Followers (Eternal Moments)*, Duncan Baird Pub.
- Menninghaus, Winfried, Valentin Wagner, Julian Hanich, Eugen Wassiliwizky, Thomas Jacobsen, and Stefan Koelsch, 2017, "The Distancing-Embracing Model of the Enjoyment of Negative Emotions in Art Reception." *Behavioral and Brain Sciences* 40.
- Muth, Claudia, and Claus Christian Carbon, 2013, "The Aesthetic Aha: On the Pleasure of Having Insights into Gestalt." *Acta Psychologica* 144(1):25–30.
- Muth, Claudia, Vera M. Hesslinger, and Claus Christian Carbon, 2015, "The Appeal of Challenge in the Perception of Art: How Ambiguity, Solvability of Ambiguity, and the Opportunity for Insight Affect Appreciation." *Psychology of Aesthetics, Creativity, and the Arts* 9(3):206–16.
- 新田義彦, 2013, 「不言の美文について：俳句における省略の機序(思考と言語)」 『電子情報通信学会技術研究報告』 112: 73-78.
- 新田義彦, 2016, 「物語性について」 『経済集志』 85(4): 167-175.
- Nomura, Michio, Tsuda, Ayano and Rappleye, Jeremy, in press, "Defining awe in East Asia: cultural differences in describing the emotion and experience of awe," Chiao, Joan Y, Shu-Chen, Li, Rebecca, Seligman and Robert, Turner eds., *Handbook of Cultural Neuroscience: Cultural Neuroscience and Health*, New York: Oxford University Press.
- Nakayama, Masataka, Yuki Nozaki, Pamela M. Taylor, Dacher Keltner, and Yukiko Uchida. 2020. "Individual and Cultural Differences in Predispositions to Feel Positive and Negative Aspects of Awe." *Journal of Cross-Cultural Psychology* 51(10):771–93.
- Routledge, Clay, Jamie Arndt, Constantine Sedikides, and Tim Wildschut, 2008, "A Blast from the Past: The Terror Management Function of Nostalgia." *Journal of Experimental Social Psychology* 44(1): 132–40.
- Shiota, Michelle N., Dacher Keltner, and Oliver P. John, 2006, "Positive Emotion Dispositions Differentially Associated with Big Five Personality and Attachment Style." *Journal of Positive*

Psychology 1(2):61–71.

Swami, Viren, Stefan Stieger, Jakob Pietschnig, and Martin Voracek, 2010, “The Disinterested Play of Thought: Individual Differences and Preference for Surrealist Motion Pictures.” *Personality and Individual Differences* 48(7):855–59.

図表

表1. 意味の曖昧性と文化が俳句の美的評価に与える効果

Random effects					
Groups	Name	Variance	SD		
ID	(Intercept)	94.74	9.73		
haikuID	(Intercept)	47.89	6.92		
Residual		393.62	19.84		
Number of obs	18929.00				
groups ID	823.00				
haiku ID	61.00				
Fixed effects					
	Estimate	SE	df	t value	p value
(Intercept)	55.51	.96	79.45	57.75	< 2e-16 **
Ambiguity	-.23	.01	18120.00	-38.67	< 2e-16 **
Culture	.52	.74	821.90	.70	.49
Ambiguity×Culture	-.08	.01	18120.00	-7.01	.00 **

** p < .01

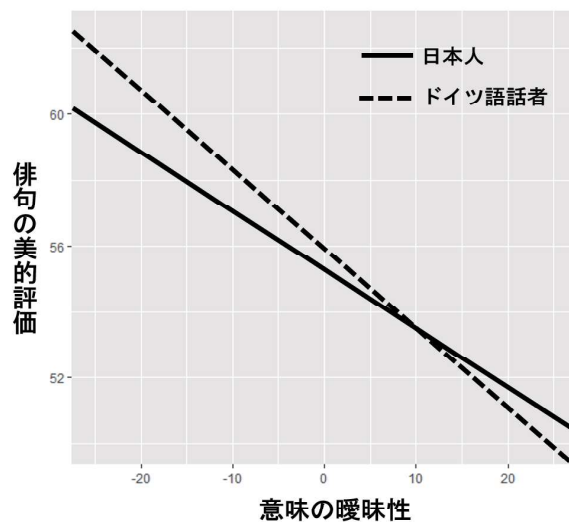


図1. 意味の曖昧性と文化の交互作用が俳句の美的評価に与える影響

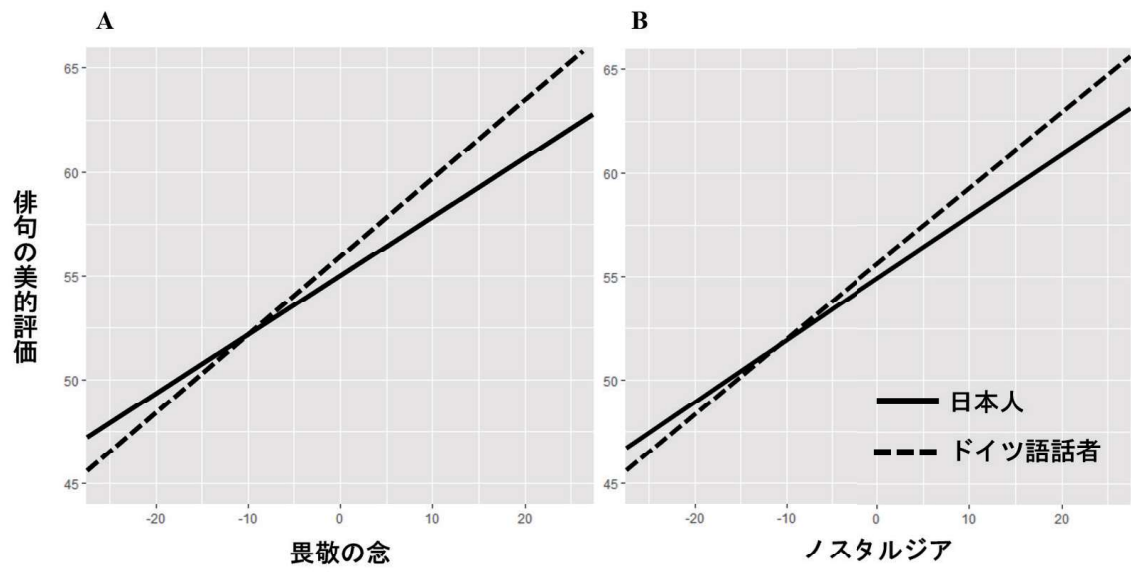


図2. (A) 畏敬の念・(B) ノスタルジア と文化の交互作用が俳句の美的評価に与える影響